

多数派に与える少数派の影響力における公的態度と私的態度での差異

1140395 秋岡 拓弥

高知工科大学マネジメント学部

1. 背景

本研究では、社会心理学における多数派への同調と少数派からの影響に関していくつかの先行研究と関連書籍を用いて理解を深め、その過程で少数派の影響力のさらなる可能性に注目した。近年の東欧の変革などの例にも見られるように、現実の社会変動に際しては、当初少数派であった人々によって始められた動きが、集団全体に影響を及ぼし、ついには少数派が多数派に変わっていくという現象がしばしば見られる。社会心理学においても近年になり、多数派の影響力による同調行動だけでなく、少数派の影響 (minority influence) に注目が集まるようになってきた (明田・岡本・奥田・外山・山口, 1994)。また、アッシュの研究に代表されるアメリカ社会心理学では、同調や標準化の側面が強調されすぎているという批判がヨーロッパ系の社会心理学者を中心に提出された。その中心となったのが、フランスの社会心理学者モスコヴィッチである。モスコヴィッチらは、少数派が多数派に抗して影響を与えるためには、少数派の行動様式が鍵になると述べている。モスコヴィッチらの主張は、従来見落とされがちだった少数派からの影響プロセスに私達の目を向けさせるという点で重要な意味を持っている。しかし、その主張に見合うだけの精度の高いデータが依然として提供できていないのが現状である。

以下ではまず、多数派の影響力および少数派の影響力に関する先行研究を概観し、そのうえで本研究の目的および仮説を述べる。

2. 先行研究

2-1 多数派の影響力に関する研究

2-1-1 アッシュの同調行動の実験

アッシュは、自身の研究において個人と個人、個人と集団との間の相互作用に表れる社会的影響過程を明らかにするために独創的な集団実験を行い、集団圧力とそれに対する同調の関係について極めて重要な報告をしている。

アッシュの実験は、基本実験といくつかのバリエーションからなっている。基本実験はまず、実験参加者 8 人の集団に、2 枚のカードを見せる。1 枚には、線分が 1 本だけ描かれてお

り、もう一枚のカードには、それぞれの長さの異なる 3 本の線分が描かれてあった。実験参加者は、3 本のうち、どれが標準刺激 (1 本だけ描かれた線分) と同じ長さかを判断するよう求められた。実験参加者は、順に答えを発表するように言われるが、実は 8 人のうち本当の実験参加者は 1 人だけであり、残る 7 人はあらかじめ決められた判断をするよう教示された実験上のサクラであった。そして、本当の実験参加者が答える順番は 7 番目である。

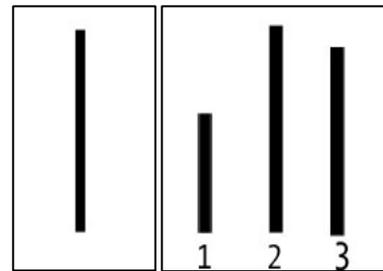


図 1 同調実験用カード

実験は、前述したようなカードの線分判断を 18 試行行う。このうち 12 試行が、サクラによって全員一致で故意の誤った判断がなされる圧力試行であった。用いられた線分の長さと同調の判断は、表 1 に示されている。なお、サクラおよび実験参加者は、いずれも男子大学生であった。

試行	比較線分の長さ(インチ)			標準線分の長さ(正答)	サクラの判断
	1	2	3		
1	8.75	10	8	2	2
2	2	1	1.5	1	1
3	3.75	4.25	3	3	1*
4	5	4	6.5	1	2*
5	3	5	4	3	3
6	3.75	4.25	3	3	2*
7	6.25	8	6.75	2	3*
8	5	4	6.5	1	3*
9	6.25	8	6.75	2	1*
10	8.75	10	8	2	2
11	2	1	1.5	1	1
12	3.75	4.25	3	3	1*
13	5	4	6.5	1	2*
14	3	5	4	3	3
15	3.75	4.25	3	3	2*
16	6.25	8	6.75	2	3*
17	5	4	6.5	1	3*
18	6.25	8	6.75	2	1*
* 圧力試行—サクラの一致した誤りの判断がなされたことを示す。					
(1インチは約2.50cm)					

結果

実験群の実験参加者 50 人の結果をみると、圧力試行時の回答の約 1/3 が、多数派であるサクラの誤った回答と同じ誤りか、長さにおいて同一方向の誤りをしていた。一方、統制群として、このような全員一致の誤りに直面しない実験もなされたが、そこでの実験参加者には、線分判断の誤りはほとんど見られなかった。ところで、多数者であるサクラに対する反応には、かなりの個人差がみられた。実験群被験者の 1/4 は、全くサクラに影響されず、独立した正しい判断をした。逆に 1/3 の実験参加者は、試行の半数またはそれ以上において、サクラの方へ同調していた。その結果は表 2 に示されている。

表2 実験群と統制群の誤りの分布

圧力試行での誤り	実験群* (n = 50) 人数	統制群 (n = 37) 人数
0	13	35
1	4	1
2	5	1
3	6	
4	3	
5	4	
6	1	
7	2	
8	5	
9	3	
10	3	
11	1	
12		
合計	50	37
平均	3.84	0.08
* 実験群の誤りはすべてサクラの判断の方向への誤りである。		

実験バリエーション

【バリエーション 1】

8 人の集団のうち、本当の実験参加者が 2 人いる場合
この条件では、本当の実験参加者は、4 番目と 8 番目に答えた。この場合、サクラへの同調は、総反応の 10.4%であった。

【バリエーション 2】 8 人の集団内に、本当の実験参加者以外に、常に正しい回答をする味方が 1 人存在する場合。

この条件では、同調が総反応の 5.5%にまで低下した。したがって、多数派であるサクラの全員一致が崩れ、味方が 1 人でもいれば同調は急激に低下することがわかる。

【バリエーション 3】

味方が途中からいなくなる場合。

味方が途中から多数者のほうへ寝返ってしまうと、同調は総反応の 28.5%になり、多数派の効果が顕著となる。ただし、この結果は実験参加者が単独であるための反応か、味方が自

分を見限ったことに反応したのかは必ずしも明らかではない。

【バリエーション 4】 妥協的な味方がいる場合。

多数者の一致した誤りと正答との中間な答えをする別のサクラが 1 人存在すると、実験参加者の誤りの回数は減少したが、その差は統計的に有意ではなかった。

【バリエーション 5】 多数派の大きさを変えた場合。

全員一致の多数者の人数を 1 人から 16 人まで変えて、同調に及ぼす効果の違いを検討した。

表 3 は、各条件における誤りの平均とその範囲を示したものである。反対者が 1 人の場合では、その効果がほとんどみられない。反対者が 2 人になると、同調による誤りは総反応の 12.8%になった。多数者が 3 人や 4 人になると、その効果は最大となり、それ以上多数派が増えてもその効果は変わらないか減少することがわかった (齊藤, 1987)

	0	1	2	3	4	8	12
サクラの人数							
実験参加者	37	10	15	10	10	50	12
誤判断の平均数	0.08	0.33	1.53	4	4.2	3.84	3.75
誤判断の範囲	0~2	0~1	0~5	1~12	0~11	0~11	0~10

バリエーション 5 の結果は (ある程度までは) 影響を与える人間の数が多ければ多いほどその影響力が強いことを示している。すなわち、人々は多数派の影響力を受けやすいことが示されていると考えられる。一方、バリエーション 2 の結果は 1 人という少数派であっても影響力を与えうる可能性があることを示している。

2-2 少数派の影響力に関する研究

多数派の影響力を示す実験研究が多く示されてきた中で少数派の影響力が発揮されることを示す研究も登場した。その代表的な研究がモスコヴィッチらの研究である。

2-2-1 モスコヴィッチらの少数派影響の実験

モスコヴィッチらは、少数派の行動の一貫性が多数派の側に心理的葛藤をもたらし、多数派に行動を変化させるとの主張を検証する実験を行った。

【実験方法】

第一実験：実験参加者は女子大学生で、実験集団は 4 人のナイーブな (本当の) 実験参加者と 2 人のサクラの実験参加者から成っていた。実験の材料として、明るさの異なる 6 枚に

スライドが用意された。スライドの色はすべて「青」であり、3枚が残る3枚よりも相対的に明るさの度合いが大きくなっていた。

実験参加者は色の知覚に関する実験であると教示され、課題は呈示される一連のスライドの色と明るさについて判断し、口頭で答えるという議題であった。

判断を行う前に、実験参加者は色覚に関するテストに答えた。これは実験参加者の色覚が正常であることを確認するとともに、集団成員が互いに正常な知覚の持ち主であることをしらせるために行われた。

予備試行ののち、本試行に入り、6枚のスライドがそれぞれ15秒間呈示された。これが6回くり返され、計36試行行われた。サクラは各試行において提示された青色のスライドに対し、常に青ではなく「緑」と答えた。なお、実験は32の集団において行われ、サクラはそのうち、12の集団において1番目と4番目に答えるようになっていた。

第2実験：次に、少数派の影響が言語的な判断でなく、色の知覚の仕方そのものに変化を生ぜしめるかどうかを検討された。

実験の最初の段階は第1実験と同じで、サクラが一貫して色名を緑と答えるようになっていた。一連の判断が終わった後、実験者は、実験参加者にこの実験とは別の実験に参加してほしいと告げ、他の実験者と交替する。

この第2実験は、視覚における練習効果に関する実験であるとして、16枚の色相上緑から青までの色刺激を実験参加者に呈示した。このうち、3枚は「青」3枚は「緑」とはっきり判断できる刺激であり、残る10枚はそのいずれもつきかねる青緑系の曖昧刺激であった。

16枚の刺激は、それぞれ約5秒間呈示され、色判断が計10回くり返された。この実験には、10集団が参加した。

第3実験：ここでは、サクラの行動の一貫性の程度を変えて実験が行われた。実験の手続きは第1実験と同じであるが、サクラは、36回のうち、24回を「緑」、12回を「青」と判断した。この実験には、11集団が参加した。

統制群：サクラがいない場合、どのような判断がなされるかをみるために、統制群として、6人の実験参加者からなる4集団が実験に参加した。ただし、このうち2人は、教示にしたがって反応しなかったため、データから除外された。

【結果と考察】

第1実験におけるナイーブな実験参加者128人の答えの8.42%が色名を「緑」と答えた。スライドは「青」であり、統制群の実験参加者22人についてみると、1人だけが2回「緑」と答えたのみで、合計反応に対し、その生起率は0.25%にすぎなかった。

この差は統計的に有意であり、実験群の実験参加者が一貫して緑と答える少数派（二人のサクラ）の影響を受けて、自らの判断を変更したことが明らかとなった。

その他のデータも同様に少数派の影響を示している。たとえば、少数派の影響を受け、それに屈した実験参加者は、全体の32%にのぼっていた。また、影響を受けた集団と受けなかった集団、とに分けてみると、前者の集団の実験参加者の57%がサクラと同じ反応をしたことがわかった。なお、サクラの答える順番による影響力に差はみられなかった。

第3実験で、サクラは一貫しない判断をしたが、この場合にはナイーブな実験参加者の答えの1.25%しか「緑」の反応はみられなかった。したがって、少数者の一貫した判断が、多数派に影響を与える重要な要因であること示唆されたといえる。さらに、第2実験において、少数派の影響が、色の知覚の基準そのものに影響を与えるかどうかを検討された。そして、反応の閾値が測定され、①実験参加者が緑と青とを判断する50%閾、②実験参加者が75%緑、25%青と判断する上閾値、③実験参加者が25%緑、75%青と判断する下閾値、それぞれが算出された。実験群37人と統制群22人の50%、75%、25%閾を比較すると、予想されたような閾値の変化（青方向へのズレ）がみられた。これは、実験群の実験参加者が少数者の影響を受けて、緑反応を増大させ、知覚の基準そのものを変化させたことを意味している。このように、少数派の一貫した行動は多数派の判断や行動に変化をもたらすことが明らかにされた。こうしたモスコヴィッチらの研究は、革新の過程を考察する上で重要なものといえる（斉藤, 1987）。

2-2-2 マースとクラークの少数派影響と同調の比較実験

モスコヴィッチは、同調と少数派の影響は、二つの異なる影響過程であり、多数派の影響は、公的には同調を引き起こすが、私的な受容を伴わないのに対し、一貫した少数派は、公的な屈従がみられなくても、私的な受容を生み出すと指摘している。こうした点から、マースとクラークの研究は、まず実験1において、少数派の意見は、屈従を引き起こすことが

なくとも、私的受容を生み出すとの仮説を検証しようとした。

【実験1】

実験1では、実験参加者に実験参加者自身の意見とは異なる少数派と多数派の意見が同時に呈示された。話題として同性愛者の権利がとりあげられた。議論の方向による影響を防ぐため、実験条件の半分は、少数派が同性愛者の権利を認め、多数派が認めないとの立場であり、残る半分の条件ではこれと逆になった。

まず、大学生の同性愛者に対する態度を測定するため、7点尺度上に回答を求め、その得点が中程度の84人の女子大学生が実験参加者となった。

【実験方法】

三つの影響条件と二つの反応タイプ（私的反応か公的反応）の3×2要因計画で、計六つの実験条件が設けられた。

影響条件1

多数派が同性愛者の権利に反対で少数派が賛成の条件：実験参加者は、討論の要約を読むように求められた。この要約は5人からなる女子大学生の60分間にわたる討論の要約で、5人のうち1人が同性愛者の権利に一貫して賛成、残る4人が一貫して反対に意見を述べていた。少数派と多数派が述べた議論の数は、双方とも同じ八つであった。

影響条件2

多数派賛成・少数派反対条件：1と逆で、少数派が同性愛者の権利に反対で、多数派が賛成の意見を述べる条件。議論の数と内容は1と同じである。

影響条件3

統制条件：討論の要約が呈示されない条件。

反応タイプ：以上の3条件の実験参加者のそれぞれ半数ずつが、私的反応または公的反応のいずれかの条件に割り当てられた。公的反応条件の実験参加者は、「このあと日程をみて、討論集団に参加して、あらたに討論を行ってもらいますので、あらかじめ、あなたがどういった考えをもっているかを集団に知らせていくため、質問紙に回答してほしい。」と告げられた。私的條件では、実験参加者は、匿名であることを十分に保証された形で質問紙への回答を求められた。

【実験結果】

影響条件と反応タイプの要因に交互作用がみられた（表）。つまり、影響条件2の実験参加者は私的反応より公的反応で、

同性愛者の権利に、より好意的な態度を表明した。影響条件1の実験参加者は、逆に公的反応よりも私的反応で、同性愛者に好意的な態度を表明する傾向があった。また、影響条件1での私的反応は、影響条件2での私的反応よりも、同性愛者の権利に好意的であった（Mass & Clark, 1983）。

表4 実験1における実験後態度得点の平均

	影響条件		
	多数派反対 少数派賛成	統制	多数派賛成 少数派反対
私的	3.70	3.94	4.38
公的	4.22	4.14	3.48

数値は7点尺度上の態度得点であり、得点が高いほど同性愛者の権利に反対であることを示す。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、マースとクラークの少数派影響と同調の比較実験（Mass&, Clark, 1983）で実証された結果が実験状況を変えても、再現されるか否かを検討することにある。マースとクラークの実験では、実験参加者は実験で意見を求められたトピックに対して賛成でも反対でもない中庸の意見を持っていた。本研究では実験参加者が、多数派の立場にあるという場面・状況を用いて彼らの実験を追試する。

本研究で人々が多数派の意見を持っている場面を検証する理由は以下の通りである。マースとクラークの研究によって中庸な立場にいる人に対して少数派の影響力が働くことが明らかになった。では、もともと多数派の立場にいる人たちへも少数派の影響力は及ぶ可能性はないだろうか。多数派の立場にある人々に対しては少数派の影響力が及ばない、と考える理論的根拠は無いだろう。ならば多数派の立場を持つ人々に対しても少数派の影響力が及ぶと考えられる。本研究ではこの仮説を、調査用紙を用いて検証する。繰り返しになるが、本研究とマースとクラークの先行研究との相違点は、先行研究では実験参加者は（同性愛者の権利に対して）中立な立場の意見を持っている人であったが、本研究では実験参加者は最初から多数派の立場にあるという点である。

4. 方法

2014年1月28日に、高知工科大学の講義内の15分程度の時間で、その時に出席していた18名の男女大学生に対して質問紙調査を実施した。次に、1月30日にも同様に、その時出席していた16名の男女大学生に対して質問紙調査を行った。

よって実験参加者は合計 34 名である。質問紙は公的条件と私的条件的の 2 パターンを半分ずつ用意し、実験参加者にランダムに配布した。

5. 実験デザイン

独立変数は態度の種類（公的態度か私的態度か）と、少数派の影響（ありかなしか）である。前者は参加者間で配置され、後者は参加者内で配置された。従属変数は提示された意見・議題に対する賛成から反対までの態度の程度である。

6. 質問紙の内容

大学生を対象として質問紙調査を実施したため、質問紙の議題内容は大学生にとってより身近なものとなっている。

質問紙には 4 つの議題が提示され、参加者はそれぞれの議題に対して自分自身の意見を回答した。具体的には、

- ・学生は積極的にアルバイトをするべきである。
- ・学生は授業のすべての回に出席した方がよい。
- ・学生は授業に遅刻しないで出席すべきか。
- ・電車、バスなどの公共交通機関では席を譲るべきだ。

の 4 つである。実験参加者は 4 つの議題に対して「1：完全に反対である」「4：どちらでもない」「7：完全に賛成である」の 7 点尺度上のひとつの数値に丸を付け回答するよう求められた。次に、実験参加者は各議題に関しての討論の要約を読むように求められた。4 つの議題に対する議論の要約を具体的に以下に示す。

- ・学生は積極的にアルバイトをするべきである。

「あるゼミの時間でアルバイトの是非に関する討論会が開かれました。ゼミの出席人数は 5 人です。ゼミでは 5 人それぞれが自分の意見を述べ合いましたが、4 人がアルバイトに対して賛成の意見を表明する中、1 人はずっと反対の意見を述べ続けました。その議論を簡単にまとめると、以下ようになります。

A さん：大学生になればアルバイトをして当たり前だ。

E さん：学生の本分はアルバイトではなく学業だから「アルバイトをするのが当たり前」というのはおかしいよ。

B さん：親の負担を少なくするためにアルバイトをするべきだと思うわ。

E さん：アルバイトをして留年したりすればもっと親の負担が増える。アルバイトが親の負担軽減になるとはかぎらないでしょ。

C さん：アルバイトをすることで社会経験が出来るよね。

E さん：専門科目を学ぶことで自分の能力を伸ばし、社会に役立つ人間へと成長することが大学の本分だから、大学生のうちから社会経験を積むことはそれほど重要ではないんじゃないかな。

D さん：アルバイト経験は就職活動に何かしら役に立つはずだ。

E さん：繰り返しになるけど、就職活動に最も役立つのは自分自身の能力を高めることだよ。アルバイトでもそれは磨かれるかもしれないけど、それは大学生じゃなくても出来ること。大学生じゃなければ出来ない「学業を修める」という活動を最も重視すべきだよ。

このようにして、5 人全員が賛成や反対という結果にはなりませんでした。」

- ・学生は授業のすべての回に出席した方がよい。

「あるゼミの時間で、授業には全て出席すべきかの是非、に関する討論会が開かれました。ゼミの出席人数は 5 人です。ゼミでは 5 人それぞれが自分の意見を述べ合いましたが、4 人がこの議題に対して賛成の意見を表明する中、1 人はずっと反対の意見を述べ続けました。その議論を簡単にまとめると、以下ようになります。

A さん：授業内容をちゃんと理解するには全て出席すべきだと思うな。

E さん：でも、全ての授業に出席するのと、講義内容がちゃんと理解できるかは別問題だよ。

B さん：一回の授業分のお金が無駄になるって考えたら全出席すべきだよ。

E さん：その講義内容をしっかり学べて、単位も取れていれば無駄ではないよ。

C さん：講義をしてくれている先生に失礼になるから出席すべきだと思うな。

E さん：義務教育ではないから、先生に対して失礼かを気にするのは違うと思うな。自分にとって何が良いのかを気にすべきだよ。

D さん：確かにそうかも。でも、私は自分に対する周りの人からの評価が下がるんじゃないかって思っちゃう。

E さん：それこそいらぬ心配だよ。さっきも言ったけど、大学は自分が何をしたいのかに重きを置くべきで、他人を気に

してはいけないよ。だから、授業も必ずしもすべて出席すべきというわけじゃないと思うな。」

・学生は授業に遅刻しないで出席すべきか。

「あるゼミの時間で「遅刻はすべきでない」ということに関する討論会が開かれました。ゼミの出席人数は5人です。ゼミでは5人それぞれが自分の意見を述べ合いましたが、4人がこの議題に対して賛成の意見を表明する中、1人はずっと反対の意見を述べ続けました。その議論を簡単にまとめると、以下ようになります。

Aさん：私は途中から教室に入ると、ほかの人の邪魔になるから遅刻すべきでないと思うわ。

Eさん：やむを得ず遅刻してしまう人もいるし、静かに入ってくればそんなに邪魔にはならないと思うよ。

Bさん：でも、授業の進行を妨げるし遅刻すべきでないよ。

Eさん：確かに話している途中に入ってくれば話を中断させてしまうこともあると思う。けれど、その場合でもせいぜい1、2分程度だと思し、ある程度は許されるべきだと思うけどな。

Cさん：私は成績に関わるし、遅刻すべきでないと思います。

Eさん：成績にかかわってくるまで遅刻したり、遅刻し続けるのはダメだと思うけど、それは極端なことで、少し遅刻したぐらいじゃ成績には関わらないよ。

Dさん：すこし話がずれるけど、私は自由な席に座れないので遅刻したくないな。

Eさん：そうだね、それは履修している人数や、教室の大きさも関係するから、必ずしも遅刻することだけが原因じゃないよね。」

・電車、バスなどの公共交通機関では席を譲るべきだ。

「あるゼミの時間で、席を譲ることの是非に関する討論会が開かれました。ゼミの出席人数は5人です。ゼミでは5人それぞれが自分の意見を述べ合いましたが、4人がこの議題に対して賛成の意見を表明する中、1人はずっと反対の意見を述べ続けました。その議論を簡単にまとめると、以下ようになります。

Aさん：社会的な暗黙のルールとなっているから譲るべきだ。

Eさん：私はそうは思わないわ。席を譲るとするのは自分の意思で思いやりを持ち行うもので、社会的なルールだから、

仕方なくするものではないと思うけど。

Bさん：でも、譲らないと自責の念にかられてしまうし、、、

Eさん：うーん、私は譲らないと悪だ、という訳ではないし、そのことで責任を感じる必要はないと思う。譲ることが重荷になってしまっているよね。

Cさん：体が不自由な人に席を譲らずに、もしその人が倒れたりしたら大変だよ。

Eさん：それは気にしすぎだよ。もし倒れたとしてもCさんの責任じゃないし、その時は周りの人と協力して対処してあげればいいしね。

Dさん：席を譲るとなんかあつたかい気持ちになるよね。

Eさん：私は、それは自己満足なのでは？と思うわ。やはり、思いやりの気持ちがあつてこそそのものだと思う。それに、前に譲ろうと思えば声をかけたら断られたことがあるの。それなら譲って欲しい時は自分で言ってほしいと思ったわ。結局、譲りたい人が譲ればいいのかと思うわ。それに見た目でその人を判断するのはどうかと思うしね。」

以上が4つの議題の要約である。

この要約は、5人のうち1人が各議題に関して一貫して反対、残る4人が一貫して賛成の意見を述べていた。少数者と多数者が述べた議論の数は、双方とも同じ4つであった。その後、公的条件の質問紙では、“あなたはこれから見知らぬ他の人たち4人とアルバイトの是非について議論する、と考えてください。あなたは見知らぬ他の人たちに表明する意見として、どのような意見を持っていますか？ あなたの意見をお聞かせください。”と明示された上で、もう一度、各議題に対する態度を最初の回答と同じ7点尺度上で回答するように求められた。私的条件では、“ここであなたの意見をお聞きします。あなたの意見は実験のデータの1つとして扱われ、個人的な情報が全くわからないようにされた上で統計的に処理されます。次の質問に対してあなたの意見をお聞かせください。”と明示された上で、もう一度、各議題に対する態度を最初の回答と同じ7点尺度上で回答するように求められた。

6. 結果

Q1とQ2の平均値

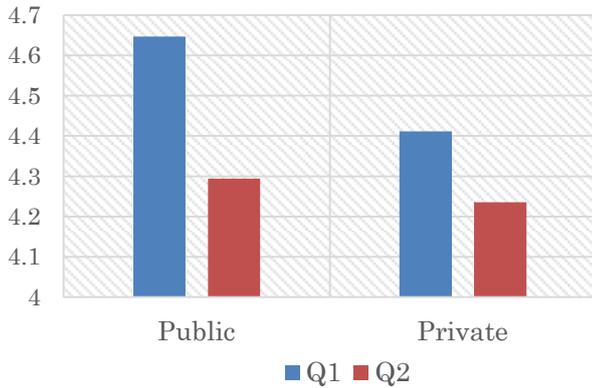


図 2 : Q1 と Q2 の平均値

Q3とQ4の平均値

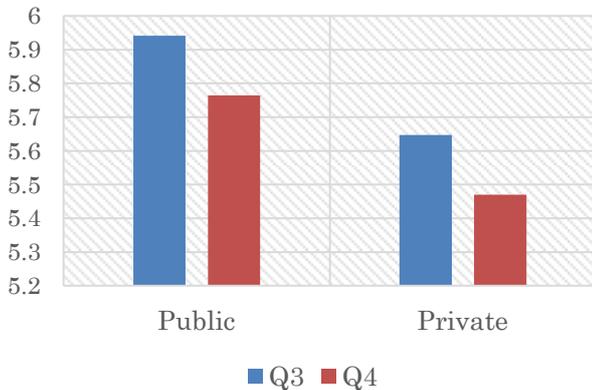


図 3 : Q3 と Q4 の平均値

Q5とQ6の平均値

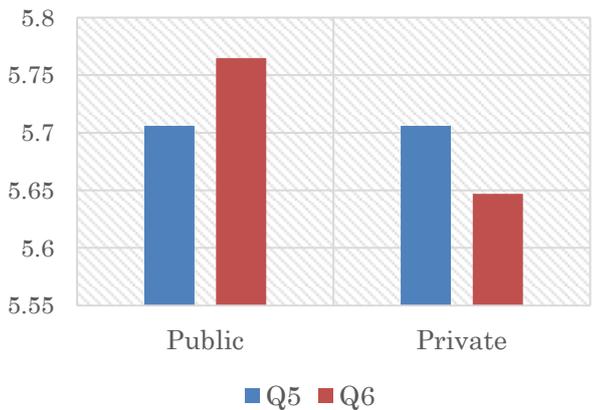


図 4 : Q5 と Q6 の平均値

Q7とQ8の平均値

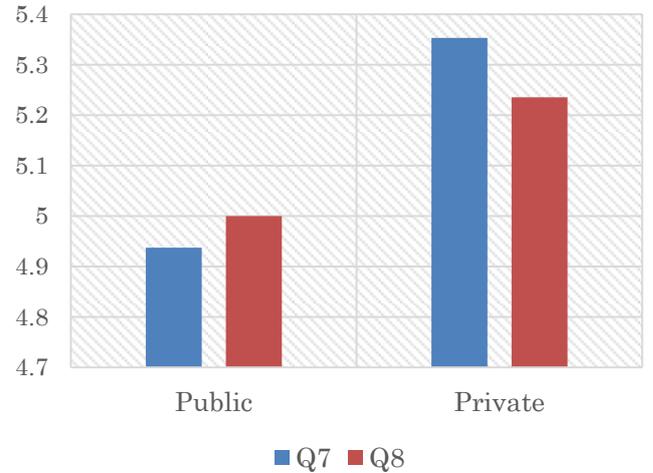


図 5 : Q7 と Q8 の平均値

表 5 : Q1 ~Q8 の公的・私的條件それぞれの平均値と標準偏差

		平均	標準偏差
Q1	public	4.647059	1.271868
Q2	public	4.294118	1.159995
Q3	public	5.941176	1.297622
Q4	public	5.764706	1.300452
Q5	public	5.705882	1.403776
Q6	public	5.764706	1.25147
Q7	public	4.9375	1.062623
Q8	public	5	1.095445
Q1	private	4.411765	1.325652
Q2	private	4.235294	1.25147
Q3	private	5.647059	1.656094
Q4	private	5.470588	1.736291
Q5	private	5.705882	1.447615
Q6	private	5.647059	1.455214
Q7	private	5.352941	1.221739
Q8	private	5.235294	1.20049

それぞれのシナリオにおいて、参加者が初期に持っていた（少数派の影響力が及ぶ前の）態度の平均値（Q1、Q3、Q5、Q7）と、少数派の影響力が示された後の態度の平均値（Q2、

Q4、Q6、Q8) とを私的・公的それぞれで比較する t 検定を実施したところ、いずれにおいても有意な差は見られなかった。(私的条件の Q1 と Q2 : $t(16) = 0.90, p = .382$; 公的条件の Q1 と Q2 : $t(16) = 2.07, p = .055$; 私的条件の Q3 と Q4 : $t(16) = 1.85, p = .083$; 公的条件の Q3 と Q4 : $t(16) = 1.85, p = .083$; 私的条件の Q5 と Q6 : $t(16) = 0.44, p = .668$; 公的条件の Q5 と Q6 : $t(16) = 0.57, p = .579$; 私的条件の Q7 と Q8 : $t(16) = 1.46, p = .163$; 公的条件の Q7 と Q8 : $t(16) = -1, p = .333$)

7. 考察

本研究の目的は、マースとクラークの研究に基づき、人々は自らが多数派の立場である場面・状況においても、少数派の影響を受けるのか、つまり、少数派影響は、もともと多数派の立場に居る人にも私的受容を引き起こすのかということを示すことであった。結果、多数派の立場を持つ人々に対しても少数派の影響力が及ぶのではないかと仮説は支持されなかった。以下では仮説が支持されなかった理由について考察する。

まずは、仮説が間違っていたという可能性に関して述べる。つまり「立場が多数派だからといって、公的な態度が少数派に引っ張られて変わる」という仮説が間違っていたということである。では、なぜ間違っていたのだろうか。

例えば、少数派に影響されて自分の立場が変わる場合でも、その少数派の影響力は小さなものなのかもしれない。マースとクラークのように「どちらの立場でもない」という場合は少数派に影響されるが、多数派の立場から少数派の立場に変わるほどの影響力は無い可能性がある。あるいは、そもそも多数派の立場にあり、シナリオでも自分の立場が多数派であることが示されているので、自分の立場が正しいことを確信するように多数派の影響のみを受けていた可能性も考えられる。

次に、実験操作や実験で用いた場面設定が適切ではなかった可能性がある。そもそも今回の研究で、マースとクラークの研究のように「私的態度では少数派の影響が出る」という結果も十分には再現することができなかった。これは上述のように少数派の影響力の弱さに起因する可能性があるが、一方で、少数派の影響力を実験参加者に示すやり方が適切ではなかった可能性もある。多数派の四人と少数派の一人の意見を呈示する方法を、より現実的に少数派の一貫性を感じられ

るようにすべきであっただろう。また、議題として設定した題材が適切ではなかった可能性もある。実験参加者が多数派の意見を持つように意図した議題ではあったが、最初に測定した参加者の態度でも多数派の意見に顕著に偏っている傾向は見られなかった。あるいは、図 2、3、4、5 から、平均値の傾向が予測通りの方向になっている議題もあるが、統計的に有意には至らなかった議題があることから、実験の参加者の数が足りないという理由で仮説が支持されなかった可能性がある。今後、更に参加者の数を増やして検証を行う必要があるだろう。

8. 引用文献

- ・明田芳久・岡本浩一・奥田秀宇・外山みどり・山口勲 (1994). ベーシック現代心理学-社会心理学 P.155 有斐閣
- ・斉藤勇 (編) 対人心理学重要研究集 1 - 社会的勢力と集団組織の心理 P.70-72, 94-96 誠信書房
- ・Mass, A. & Clark, R. D. III. (1983). Internalization versus compliance : Differential process underlying minority influence and conformity. *European Journal of Social Psychology*, 13, 197-215